



C・トレーガーの世界文学構想の方法について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006377

C・トレイガーの世界文学構想の方法について

船越克己

P・ヴェーバーは「世界文学」という概念の形成⁽¹⁾と題する論文の中でトレイガーの文芸学の方法を批判した。直接、批判の対象となつたのは『ヴァイマラー・バイトレーゲ』誌(二九七四・七)に発表されたトレイガーの論文「世界史―国民文学、国民史―世界文学⁽²⁾」である。ヴェーバーは「選択的」(selective)世界文学の概念か、それとも「伝達的」(kommunikativ)世界文学の概念かと問いかけ、前者はトレイガー、後者はR・ローゼンベルクによって代表されると指摘し、ローゼンベルクに軍配を上げている。ヴェーバーの支持するローゼンベルクの主張は次の通りである。「世界文学の概念はそれゆえ国民文学の概念に対する相互補充的なものとして用いられる。両概念は価値論的には定義されず(文学史家たちの合意によつて、一つの国民的ないし超国民的な美的価値が付与される文学作品群の概括として)、経験的に、つまり現実的な、国民的ないし国際的文学コミュニケーションの意味において定義される。」⁽⁴⁾ローゼンベルクの立場は文学過程の複合の諸要因をそれらの社会的機能性の中で説明しようとするものだ。それではトレイガーの考えはどうであらうか。

トレイガーは前掲の論文において、どのような歴史的条件のもとで「国民文学的作品あるいは真の国民文学なるものが〔……〕世界史的

意義と影響の高みに」⁽⁵⁾立ち、それによつて「世界文学への寄与」を果たすことができるかを問うている。それに対してヴェーバーは、アツチカの悲劇から社会主義的リアリズムにいたるトレイガーの選択的系譜は「文学過程の具体性」⁽⁶⁾(強調は引用者を欠く「芸術進歩の系譜」にすぎぬ、と批判する。

ローゼンベルクによると、われわれはもはや「イデオロギイ的・美的進歩の諸系譜の抽象」⁽⁷⁾に甘んじることができぬ、文学史は「社会の現実の文学コミュニケーション過程の歴史として」把握されるべきだといふのである。もちろんこの態度表明はあからさまにトレイガーの方法を非難したものではない。ローゼンベルクの危惧は、「進歩の系譜」の「構造」は現実の、決して「直線的」に経過することのない歴史の過程を「単純化」⁽⁸⁾するものではないか、というものであつた。しかし『ヴァイマラー・バイトレーゲ』誌(二九七五・二)に掲載された、このローゼンベルク論文の核心である「機能的考察」は、ヴェーバーによるゲーテの世界文学概念の受容とともに、数年のちにトレイガーによつて疑問視される。なぜならローゼンベルクの考察は「歴史性」と切離せぬ美的「価値」⁽⁹⁾を無視しているからである。

一九八一年に加筆・修正され、論文集の一篇として発表されたトレイガーの論文「世界史―国民文学、国民史―世界文学」では旧稿で示

峻された比較文学における「歴史的進歩」⁽¹⁰⁾の観点に加えて、「文学生産、コミュニケーションおよび消費（受容）」⁽¹¹⁾の視点が新たに強調されている。だからといってローゼンベルクの提唱する、文学の「社会的機能関係」⁽¹²⁾に焦点を当てる方法が免罪されたわけではなく、その方法は「作用と反作用の岸辺なき海」⁽¹³⁾の中で文学自体を廃止する危険をもつと決めつけられた。先にヴェーバーが「選択的」と「伝達の」と命名して対比したトレーガーとローゼンベルクの世界文学の概念はそれぞれ、「歴史的進歩」と「コミュニケーション過程」の概念として再対比できるのであろう。

一九八三年刊行の『芸術時代。一八世紀末のドイツ文学に関する論集』に収められた、編集責任者ヴェーバーの巻頭論文「文学史の概念としての『芸術時代』」⁽¹⁴⁾は、その後『ヴァイマラー・バイトレーゲ』誌でも何度か批評の対象として取上げられた。ヴェーバー論文の提案は「啓蒙主義末期と三月革命前時代の間のドイツ文学の発展を、文学と社会の特殊な諸関係によってつくり出された単一の時代」として研究し、叙述してはどうかというものである。この提案はヴァイマルで開かれた、ドイツ民主共和国(DDR)のドイツ古典主義文学ならびにロマン主義文学研究者による恒例の会議(一九八一・三)で熱い議論を呼んだという。ヴェーバーの「芸術時代」の提案は、その会議の報告者が期待をこめて指摘するように、「一つの複雑な時代関係を新しい視角から複合的に把握し、かつ史的唯物論的に基礎づけよう」とする一つの試みであった。

DDRの文芸学は七〇年代初頭の「ヤウスの受容美学があたえたインパクト」⁽¹⁵⁾を吸収し、新たな「理論的実験」期に入ったといわれる。われわれの引いたヴェーバー・ローゼンベルク対トレーガーの世界文学

論争のささやかな場面は、はからずもわれわれをDDR文芸学の方
法論をめぐる「実験」の一面面に導いた。われわれの視界において最
初に批判の矢をあびたトレーガーの文芸学の特徴はいかなる方位に
あったのか、かつ今あるのか、その問題を検討してみよう。

二

トレーガーの世界文学の構想は「歴史的進歩」の概念を内包する。
かれは歴史進歩の光と陰の産物として世界文学の座を三様に指定し
た。⁽¹⁶⁾つまりトレーガーはマルクス主義的歴史の進歩の概念に依拠し
て一つの世界文学の図式を作り上げる。(一)国民史が世界史的水準の上
を動かすか、あるいはそれを代表している場合、国民文学は世界文学的
意義と作用の平面を動く可能性をもつ。一例えばアッチカの悲劇、中
世盛期のアラビアとペルシャの詩、ダンテとペトラルカ間のイタリ
ア文学、シェークスピアからロマン主義にいたるイギリス文学、一七
世紀中期から一九世紀末期にいたるフランス文学、ゴッリキート
とショーロホフの間のソヴィエト文学。(二)没落しつつある社会現実な
いし立遅れた社会現実の上に、自国や他民族の最良の伝統と志向が保存
されている文学がそびえる場合、その文学は現実の国民史(みじめな
社会経済の基礎ないし政治的、社会的諸関係)と対立しつつも、いわ
ば本来の国民生活の代理として出現する。一例えばスペインの黄金時
代の文学、プシューキンとチェーホフの間のロシア文学、若干のラテ
ンアメリカ文学。(三)世界的に重要な運動を直接共有しないが、その
精神的参加者となる立場に一国民が置かれた場合、その国民文学は世
界史的運動が提起する問題を反映し、それを自ら芸術形象に作りかえ、
それをより普遍化された世界の鏡の中に示す。一例えばドイツ文学。

この三つの世界文学の典型の図式はヴェーバーの批判する「選択的」世界文学の概念のもつ弊害に陥っているかにみえる。ヴェーバーによれば、そうした「選択的」方法は広範な「社会的・機能的」視点から目をそむけ、「特定の認識論的視点」を個別に擁護し、それにより「文学諸関係の総体の大部分を消去する」⁽²⁰⁾のだ。おそらくトレイガーはヴェーバーの批判を深刻に受けとめた一人ではなからうか。論文「世界史―国民文学、国民史―世界文学」の改稿におけるトレイガーの新たな釈明は「選択的」世界文学に対するヴェーバーの批判への回答とみなすことができる。トレイガーは「文学生産の直線的進歩の仮定、いわば自動的、精神的に増殖をつづける『世界文学の』巨匠と傑作の系図の仮定」⁽²¹⁾が前提からはずされていることは当然である。そのことはあの三様の分類法から得られた世界文学の概念が何ら「古典概念」に還元されるものでないことを考慮すれば明瞭である、と。トレイガーは文学の一面を「歴史的発展の一要因」とみなし、あらゆる文学は文学を生み、作用させる「同一の基本過程の等価の変種」⁽²²⁾であるとも理解する。これは文学史を歴史の発展と結合させて理解しようとするやり方であり、ローゼンベルクが幾分イロニーをこめていう「史的唯物論の文学理論の先例」⁽²³⁾に属するであろう。

トレイガーの世界文学構想が最も大胆に提示されるのは論文「文学の『主人公』と歴史的決定。ハムレット―ジュリアン・ソレル―グリゴリー・メレホフ」⁽²⁴⁾においてである。時代と国民文学をともに違える三人の主人公を「比較する方法」はどうすれば可能となり、かつ収獲が期待されうるのであろうか。およそ比較文学の領域を「国民文学の文献学の専門家の個別成果の総計」⁽²⁵⁾だけに限定することはできない。かりに比較文学がこれらの成果の総計を分析することを始めたとしても、世界的作家の場合、それは途方もない歳月を費しても不十分

であろう。比較文学は「別の前提」から出発し、「ある別の目的」を追求しなくてはならない。

トレイガーは三人の主人公の「歴史的・美的陳述」に焦点を当てることによつて、「歴史的存在としての人間」をよりよく理解することを旨とする。およそ比較の方法には一定の指標が必要である。そこでトレイガーは資本主義の始まり（『封建制の終わり』）からその終えん（『社会主義の始まり』）にいたる約三世紀を視野に入れる。この相異なる時代と場所から抽出された三人の主人公は「類型論と歴史性」⁽²⁶⁾の指標のもとに分析される。

イギリスの根源的富の蓄積とヨーロッパのヒューマニズムの高まりを背景に（二六〇〇年ごろ）、ハムレットは自己の生まれた封建世界の「非人間的な規律一点ばりの機械主義」について行くことができなかつた。「かれは行動せねばならぬ」ということは知っていたが、いかにを知らなかつた。⁽²⁷⁾ジュリアン・ソレルはブルジョア王政下の資本主義の潮流に（一八三〇年ごろ）逆らう選択をした。グリゴリーの場合（二〇世紀初頭の二〇年間）、歴史は決定を下したが、かれの方は決定することができなかつた。この三人には「基本的には同じ反応」⁽²⁸⁾がみられるとトレイガーはいう。かれらの個性はかれらの生まれた「共同体」のきずなから形成されている。しかし、かれらは自己の個性を「かれらの上に置かれた、歴史的・社会的制度」に服従さすことを拒む。かれらは「性格悲劇」の主人公ではない。かれらはかれらの「性格」ゆえに、また「同時代人に対する性格の矛盾」ゆえに没落したのではない。「個体」は「歴史的」カテゴリーであるが、「性格」は「心理的」カテゴリーにすぎない。性格は「個体の態度をただ修正するにとどまり、それを歴史の意味において規定するものではない。」⁽²⁹⁾「個体は歴史的に形成されたものではなく、自然によつて与えられたものである」という幻想の

下で、かれらはそれぞれの歴史の段階において個性の高潔さを求めてたかたかっている。そこにかれらの運命と悲劇がある。

三人の主人公に対するトレীগーの分析は「リアリズムの芸術作品」にみられる「典型的なもの、すなわち個体的現象の中の普遍的なもの」⁽³⁰⁾の概念に沿ってなされている。かつてトレীগーは、あの有名なエングルスのハークネス宛の手紙において論じられたのは「社会主義的」リアリズムの問題であったと、指摘したことがある。⁽³¹⁾ ハムレット、ジュリアン、グリゴリーの三人の主人公の比較も明らかに社会主義的リアリズムの視点に立脚したものである。かれらの使命は「未来」の準備にある。かれらはまさに「敵対する階級社会の悲劇の最終幕」⁽³²⁾を演じているのだ。こうした見解の中にトレীগーの「選択的」世界文学の構想の特徴が明瞭に表れている。

三

奴隸制、封建制、資本主義、社会主義への歴史の進展がトレীগーの世界文学の概念の枠を作っていることは先に瞥見した。就中、資本主義の生成、発展とドイツ文学の関連を単純明快に説明するのが、トレীগーの古典主義、ロマン主義に関する叙述である。

『ゲーテ時代の精神』とはシュトルム・ウント・ドラングからロマン主義盛期（二七〇—一八三〇）にいたるドイツ文学を精神的統一として把握しようとしたH・A・コルフの名著である。トレীগーはその題名を逆手にとつて、ゲーテとその時代を通して語りかけるのは「精神」ではないとし、自己の文学的史観を次のように定式化する。「社会経済の運動に由来する、イデオロギーを含んだ政治的階級利害の運動の期間に、激しい矛盾の中で一つの文学的世界像を構成したのは時代

であった。その文学的世界像はまたその創造者たちを通して、それ自身で時代の運動の能動的要素を形成したのである」⁽³³⁾。このような認識を基にしてトレীগーはヴァイマル古典主義をヨーロッパの視野からとらえ直そうとする。つまりヴァイマル古典主義はイギリスからロシアにいたる領域からその類似を探すなら、「相互にまざり合う擬古典主義とロマン主義の諸潮流」⁽³⁴⁾のうちに見出される。その全体の流れは啓蒙主義の一要素、いわゆる「センチメンタリズム」として現れる。そうした視点で、一八世紀と一九世紀初頭のヨーロッパ文学にみられる複雑な現象の統一性を仮定しようとするれば、それはこの時期のヨーロッパ文学を相互に結合する基本過程、すなわち「歴史の最も革命的要素たる生産力のうちに」⁽³⁵⁾求めねばならないだろう。

ドイツ古典主義の叙述はヨーロッパ文学の潮流との関係およびコルフの精神史的方法の功罪についての言及にとどまるが、ヨーロッパ（そしてドイツ）ロマン主義に関してはいつそう歴史と密着した解釈がなされる。ロマン主義は「歴史のささいな横枝でもなく、みじめな国民史の産物」⁽³⁶⁾でもなかった。この視点は論文「ロマン主義の歴史性と遺産」⁽³⁷⁾においても積極的評価をロマン主義に与えている。「ロマン主義は芸術を市民時代の犠牲に供することなく、統合の危険に屈することなく、芸術を批評に還元することなく、また芸術の直接の対象として、人間的理想を喪失することなく、かかる時代の事態に反対した、市民時代における最後の芸術的・文学的潮流である」⁽³⁸⁾。

以上の概観のうちに「ゲーテ時代」の「諸事実をイデーの糸で整理しよう」とするコルフの試みに対するトレীগーの共感と批判がうかがえる。シュトルム・ウント・ドラング、古典主義、ロマン主義の間のうわべの対立を強調するよりも、むしろ「それらに共通する精神的

基礎とその意味全体をドイツの、否ヨーロッパの精神史の内部で注視する」³⁹。コルフの方法をトレーガーは「文学史の理念建築」として称賛する。コルフに対するトレーガーの異議は時代の「精神」か、それとも時代の具体的な「歴史性」かという二者択一の中に求められる。次に文学史の「歴史性」についてトレーガーの各論をレッシングとヘルダーについてみることにしよう。

トレーガーはレッシングの思考から歴史主義的次元を否定する。「悠久の永遠」がレッシングのものであった、とレッシング論の末尾に掲げる。レッシングの思考は「批判主義」⁴¹の志向をもつ。批判は歴史を厳密にとらえようとするし、その厳密さゆえに歴史としての存在を保持する。だから批判主義は「歴史性の原理に対する永遠の相対物 (Pendant)」である。批判は歴史考察を排除するわけではないが、歴史的考察ではない。レッシングにとっては「批判的文獻学者 (Philologe)」として歴史を秩序づけること、すなわち「批判的・規範的分析」⁴²が第一義であった。歴史はかれにとって「テキストの姿で現在する」。テキストこそ歴史を確かめる手段であった。歴史の背後に潜むものはもとより証明することは不可能である。もしそれを行うとすれば「思弁」が必要であろう。それはまだ時期早尚であった。「さしあたりドイツにあっては、数百年の間テキストの上に推積していたがれきを掘り除いてやらねばならなかった。それがアリストテレスのテキストであろうと、ホラチウス、中世の神学者や宗教改革者たちのテキストであろうと」⁴²。かかるテキストのうちに脈打つ知識を基礎に、何が真実であるかを証明すること、それが批評家レッシングの課題であった。

そこにレッシングの方法論の限界があった。「かれは歴史の到達した現状を越えて思弁しなかった。〔……〕歴史はかれにあってはまだ目標

をもっていなかった」⁴³。その代りかれは「現在の目的」、すなわち真実の「作用」という目的をもっていた。しかし批判は変革の究極の力、すなわち「物理的力」にとつて代わることはできない。批評家はそれを意に介しない。ひたすらかれは現状にうち向かうのである。

要するにレッシングは「批判主義と歴史主義の間にあった中間休止」⁴⁴を越えることができなかった。かれは「変革者」(Umschüler)ではなかった。フイヒテとヘーゲル、ヘルダーとシラー、かれらと違ってレッシングは自己の世界観を「変革」の域まで進めなかった。トレーガーのレッシング評価の内核は歴史主義と結びつく「変革者」に非ざる批評家レッシングの救済にある。当時にあつては、ヘルダーの行った「諸現象の歴史的演繹」よりも「支配的諸説の現状に対する鋭い批判」⁴⁵の方がいつそう嫌疑のかかる行為であつた。

トレーガーのレッシング像にはドイツ市民階級のうちに「最も市民的な」⁴⁶「精神的先駆者 (F・メーリング)」としての評価は少ない。それはメーリングを修正したP・リラのレッシング像を継承したともいえない。リラが批判するように、メーリングはレッシングの美的認識を「論争」(polemik)という立場からのみ解釈し、そこにドイツの「貧困」⁴⁷に対する「社会的異議」しか見なかつた。レッシングの理論を「社会的行為」としてしか理解しないと、それはメーリングの言うように弱点をもつかもしれない。リラはそれに対し次のように主張する。「レッシングの理論は、それが社会的行為として多く作用したし、今も作用しつづけていればこそ、それだけ高いものである」⁴⁸。そしてリラは論文「レッシングの哲学の武器」の中で自己のレッシング像を鮮明に提示し、レッシングの理論と社会的行為の合致を強調する。「レッシングの哲学の武器はもはや宗教的に神秘化されぬ、戦闘的に自己を規定す

る世界観に仕える。かれの哲学的論証が仕える認識とは、この（一人類の未来への一引用者）戦鬪的執行は次の使命の弁証法的執行であるという認識である。すなわちそれは自然、社会、歴史の中で偶然に委ねられているのではなく、必然的に上昇する人類的発展の、常に高まる使命として自己を再生産する使命である。リラとは対照的にトレーガーはレッシングの功績を、かれが「ドイツの批評と文学」を先進国の水準に引き上げたこと以上に求めている。

リラはわれわれのレッシング「受容」(Aneignung)にも言及する。われわれがレッシングから受容すべきものは「貧困」を意味する論争」ではなく、「ドイツを希求するリアリステイックな要求」でなくてはならぬ、すなわちわれわれはレッシングを「進歩する歴史的弁証法の意味」において戦鬪的に受容しなくてはならぬ。トレーガーは受容に關し、レッシング自身の遺産の受容態度を注目すべきだとして、批評者レッシング像をクローズアップさせる。

ルカーチはリラに先んじ、メーリングが初期の市民時代の代表者たちの「イデオロギーの高みをかれらの階級意識の高み」によって測り、「客観的な——例えば芸術的な——尺度」によって測っていないことを指摘した。そうした批判はあるが、リラもメーリング同様、レッシングを「市民的イデオロギー」として把握する点は変わらない。レッシングは「革命的市民階級の国民的課題」を担っていた。この「ドイツ市民階級全体の代弁者」をその後の、ドイツにおける革命的方向に合流させないのはH・マイヤーである。マイヤーの指摘によれば、ディドロ（市民的階級運動全体の代表者）対ルソー（平民的要求の代理人）の図式はドイツにおいてはレッシング対ヘルダー、若きゲーテ、シュトルム・ウンド・ドラングに相当し、「市民階級全体の要求と部分的・平民

的要求」の「反定立」として現れる。ルソーの影響はヘルダーとゲーテ、シラーとジャン・パウル、フォルスターとゾイメ、ヘルダーリンとクライストに見られるが、レッシングの同時代人には全く重要体験とはなっていないという。

トレーガーはレッシングと次代との離反原因を歴史主義の意識の有無に求めている。「思考の方法」については、レッシングは「ヴォルテールからハイネにいたる想像上の系譜」にあるという。かれらはレッシングと同様に、いかなる「世界像」をも作らず、ただそのための「前提」を作ったのである。レッシングにつづく世代の人々は、ヘルダーをはじめとして、レッシングに言及することは稀であった。かれらにとって歴史はレッシングにおけるアリストテレスの「歴史的」理解の場合のように、「精神的生産のための主体の道具」ではなかった。むしろ「主体」が「歴史の道具」となった。かれらは歴史を思惟の中で支配者とした。かれらは「諸現象の歴史性」をたずねたのである。

トレーガーはレッシングの思索から歴史主義をきっぱりと排除する。リラのように「ドイツにおける市民的闘争にとって決定的」であるほどの「歴史的モメント」をレッシングの作品の中に認めていない。むしろトレーガーはレッシングの批評活動を「受容の文化」の視点の中で、遺産の受容・継承の問題としてとらえようとした。それではレッシングに欠ける歴史性は次代ヘルダーにおいていかに展開するのだろうか。

四

ヘルダーの功績は次の二点に集約される。かれが常に「ポエジーの

「歴史性」を思索したこと、そして「世界文学の行程」を省察したことである。ヘルダーの「シェークスピア」論文は「文学理論史における旋回点」をなす。シェークスピアをその「歴史性」において徹底的に解釈したのはヘルダーが最初であった。つまりヘルダーは(一)古代と「北歐」(近代)の演劇の「内容的・構造的差異」を両者の「歴史性」から推論した。(二)それぞれの時代表現の「相対的独立性」を明らかにした。(三)両者を「単一の人類史・文学史の二つの異なる段階の代表」とみなし、同時にその歴史の中に進歩を設定した。⁶³

「啓蒙主義の子」としてのヘルダーの歴史進歩の概念の危機とヴァイマル古典主義文学の成立の時期をどのように把握するか、それはトレイガーにとって自己の文学理論の方法の平板化か、精密化かという大事な問題であった。トレイガーはその時期が「分業」による社会変化する時期であったことを前提とする。「原初的生の関連からの詩人の解放と信じられていた、神話からの文学の解放は分業の過程と一致する」⁶⁴。ヘルダーは分業に基づく「進歩」のうちに「人間の内面の空洞化」が進行するのを予感した。かれはこの歴史の必然に対し「不断の戦い」を挑む。

新しい生産力の発展、商業、科学、活字印刷などがポエジーから「直接性」を奪った。そこに古典主義文学が成立し、文学は「意識され、分業化された活動」となった。こうした認識の中でヘルダーは古代への「後退」という一つの「循環」⁶⁵を仮定する。先の「シェークスピア」論文における歴史の進歩の概念とは相反する「歴史的論理」の「中断」⁶⁶がここに生じる。トレイガーはその辺の事情を「文学史の分野におけるヘルダーの壮観な、内的―かつ明らかに矛盾にみちた―統一」⁶⁷であると指摘する。

世界文学の過程を省察していたヘルダーはやがて独自の発展をとげる近代ドイツ文学の「敷居」までもに歩んだにすぎない。ゲーテ、シラーはヘルダーより離れた。ゲーテにはヘルダーの「死滅したものと腐らんしたものへの崇拜、生けるものと死せるものに対する無とん着な態度」⁶⁸(Goethe an Heinrich Meyer)はがまんならなかった。シラーもヘルダーに次のように書いた。「ポエジーが生活、時代、現実の中から生じ、それらと一体となり、そしてそれらの中へ逆流せねばならぬし、(わたしたちの状況では)それは可能だ」という貴兄の前提が認められるとすれば、あなたの勝ちです……しかし、まさしくその前提をわたしは否認するものです。思うにわたしたちの市民的、政治的、宗教的、学問的生活と影響は散文と同様、ポエジーに対立していることがわかります。(……)それゆえ詩精神にとって救いがあるとすれば、それが現実世界の領域から身を引くより他ない、とわたしは理解しています」⁶⁹。トレイガーによればゲーテとシラーが結局合意に達したのは、文学の「理論的・歴史的・世界的世界像」を「実際の・美的・世界像」の中へ止揚したことによるといふ

トレイガーはヴァイマル古典主義に対する、ヘルダーの「世界文学の構想的包括性」を支持する。トレイガーの文学史観はドイツ文学を世界文学のレベルに還元しようとする意図を強く投影する。―「ドイツ文学は短く、人類の文学は長い。」⁷⁰ゲーテ・シラーはかれらのヘルダー評価により、「かれら自身の使命」の犠牲となった。かれらは文学発展の先頭に立っていると感じたが、そのリーダースhipが「世界的尺度」⁷¹において実際そうであったか、それを知ることができなかつた。トレイガーがヴァイマル古典主義を「歴史の一休止」⁷²とみなしたことは注目し値する。ヘルダーは初期市民革命の新しい時代の中に「沈

下するポエジーの世界と、理知優先の台頭しつつある世界とを仕切る大きな中間休止⁽⁷⁴⁾を認めた、とトレイガーは説く。この新旧世界の認識がヘルダーの「古典主義との対決」の「歴史的かなめ」を形成する。

ヘルダーにとって詩文学の歴史は「人類の空想と願望の歴史」、換言すれば「人類の甘美な妄想」⁽⁷⁵⁾の歴史であった。われわれはこの思想の表出として、フォルスターの『シャクンタラー姫』訳に寄せるヘルダーの称賛を思い出す。文学の本質にかかわるこのヘルダーの考えはトレイガーの世界文学観の歴史的、美的側面に投影されている。ポエジーは政治と異なり、「階級の存在」を前提としない、純粋な文学はそれらが専ら「人間的」であるとき、「分かれたくない人間」を目ざすとき、すなわち階級のない人類の幼児期、未来の共産主義において成立する、とトレイガーはのべる。⁽⁷⁶⁾「社会主義的リアリズム」はこうした世界的「ドラマ」の最終幕を演じているという。このトレイガーの見解に対し、われわれはやはりヴェーバーの批判を引いておきたいと思う。「この選択的な世界文学概念の使用に際して、社会主義的リアリズムの特定の側面が強調され、とりわけブルジョア精神史のカノン形成物が実際にマルクス主義的に『折返され』(“umgedreht”)、ということば誤認されてはならぬ。⁽⁷⁸⁾

五

先にトレイガーは「歴史的・世界像」を一つの「美的・世界像」へ止揚したヴァイマル古典主義は「歴史の一休止」だとのべた。ゲーテ・シラーにとって市民社会への移行は革命的行為とは無縁であり、かれらは「市民」階級の歴史を「人間的」使命として詩作した。ヴァイマル古典主義は国民史の「相対的よどみ」⁽⁷⁹⁾の中で、現実の関連を異常に抽

象する方法により「世界史的運動の高み」に到達した。それは「一つの人間的、社会的根本問題」を美的・詩的に集中して考察し、歴史的現実に関し「判例」を残すことができた。

ヴァイマル古典主義のこの「世界文学的寄与」⁽⁸⁰⁾にもかかわらず、それが「歴史の一休止」の中で、つまりフランス革命にみられる市民階級の革命的前進のかたわらで、演じられたことは否定できない。その「小休止」はもちろん精神的休眠ではなかった。ヘルダーにとつても「大きな中間休止」として立ちはだかつたこの時代に対する、トレイガーの文学史的分析に焦点を当てよう。

ヴァイマル古典主義なるものは「諸矛盾を制御する」⁽⁸⁰⁾文学、「歴史性」と「規範性」の交差した文学であった。それはシラーの「美学理論」をもつてしても、ヘルダーの「人類の自由にいたる歴史的行程の、徹頭徹尾実体的な展望」⁽⁸¹⁾をもつてしても越えられぬ区切りをもつ時代の文学であった。ビュルガー批判においてシラーは「国民的代理」のために「平民層の美的欲求」を退けたし、フォルスターはその階層の「経済的・政治的要求」に革命のさ中にあつても独自の位置を与えなかつた。⁽⁸²⁾しかし美学の見解において、フォルスターがシラーの承認を得られたのはかれの思考が「擬古典主義の観念論」⁽⁸³⁾の上を動いていた限りであり、かれの芸術観における「ヘルダーのイデー」への接近はシラーにとつて許し難いものとなつた。

時代の「よどみ」を突破する文学潮流は可能であつたか。肯定的ニュアンスをもつてトレイガーは二つの潮流を認めている。両者はともに現実の歴史の流れと断絶したヴァイマル古典主義と反目する。その一つはロマン主義である。ロマン主義は「みだされた人間性への要望」⁽⁸⁴⁾を時代の弊害に抗して守り抜き、それを独自の「芸術表現」の中で次

代に「遺産」として残した。ロマン主義は理性の代わりにブルジョア階級を支配の座につけたフランス革命の、果たされぬ約束への失望の結果であった。ロマン主義は開始されつつある希望のない世界に対し、「数世紀におよぶ精神的伝統の慰安の言葉」⁽⁸⁴⁾をフマニテートの証として提示しようとした。こうしてトレイガーがロマン主義に与えられた批評の二方向——「急進的・自由主義的ないし民主主義的・革命的な方向」と「保守的・弁明的方向」⁽⁸⁵⁾のうち、前者の方向にくみするのはいうまでもない。

歴史に対し芸術的に対決したのがロマン主義だとすれば、実践的に対決したもう一つの潮流はいわゆるドイツのジャコバン主義者である。トレイガーは次のように提言する。「ヴァイマル古典主義の改良主義をマインツのイデオログの革命主義によって罷免すること」⁽⁸⁶⁾が可能であると。

世界史の大事件、フランス革命のドイツでの影響という視野に立ち、ヴァイマル古典主義の抽象性を明確にすることがトレイガーの文学史観の一課題であることは疑いない。トレイガーの幾つかの労作はそれを意図して書かれたものである。「同時代人の中の革命の扇動者としてのフィヒテ」⁽⁸⁷⁾、「ゲオルク・フォルスターと哲学の実現」⁽⁸⁸⁾、「啓蒙主義とジャコバン主義。一七九二／九三年のマインツ革命のプロパガンダ」⁽⁸⁹⁾がそれである。さらにトレイガーの編さんした資料集『赤と黒のあいだのマインツ』⁽⁹⁰⁾、『ドイツ文学に反映したフランス革命』もフランス革命がドイツ文学に与えた衝撃と意義を見きわめようとするトレイガーの基本戦略をうかがわせる。

フランス革命の余波は三月革命前時代において一応の結着をみる。アンシャン・レジームの文化的残さいの克服、ブルジョア社会によつ

てはユートピア社会は実現されぬという認識、新しく生成する労働者階級の実践が新たな文学状況の「源泉」をなした⁽⁹²⁾。そしてフランス革命期のドイツ文学は「遺産の問題とリアリズム議論」との関係で後世にアクチュアルな問題を投げかける。フランス革命の影響を濃くするジャコバン主義文学のみならず、ロマン主義文学も三月革命前時代の後に再び浮上する、とトレイガーはのべる。ロマン主義は労働者階級の「美的自己理解」⁽⁹³⁾の闘争から「さ・し・あ・た・り」脱落する。しかし労働者階級が自己の基本的な生活問題を革命的に解決し、自己の状況を深く、人間的に把握しようとするや否や、「ロマン主義的なもの」は再び「これらの文学の視野」に登場する。しかしながら、そうした文学遺産の問題とは別に、ドイツ文学の世界史的理解こそトレイガーの文学史理論の特徴であることを改めて指摘する必要がある。

啓蒙主義とロマン主義はヨーロッパのすべての国の所有である。それらは「歴史的に」比較できる。「啓蒙主義—シュトルム・ウント・ドラング—古典主義—ロマン主義」なるテーマ選択はドイツ文学研究のみにみられる。それは「精神史の産物」⁽⁹⁴⁾である。トレイガーはヴァイマル「古典主義」にヴィーラントとヘルダーを加えない。ゲート自身、かれの「時代のあらゆる矛盾」を帯びていた。「イフィゲーニエ」⁽⁹⁵⁾、「ヘルマンとドロテア」を「古典的」と呼ぶにしても、『ヴィルヘルム・マイスター』、『親和力』、『ファウスト』を「古典的」と呼ぶわけにはいかない。そもそも「ヴァイマル古典主義」の「古典性」はその啓蒙主義的特徴と関連した部分で認められるだけで、「ヴァイマル古典主義」は文学としては「古典主義的、ロマン主義的、写実主義的モメント」⁽⁹⁶⁾の統一にほかならない。

ゲート時代の「精神」を「社会経済的運動」に還元しようとするト

レーガールの文学史観は「ヴァイマル古典主義」という聖なる呼称よりもその実体に迫ろうとする。

六

「ヴァイマル古典主義」なる文学史概念に代えて、その時代の文学現象を共時的に、ヨーロッパ史との関連において把握しようとするトレーガールの試みはフランス革命時代のドイツ文学という標識を定めた。現実からの離反のゆえに「ヴァイマル古典主義」の有する理念をトレーガールは葬ろうとしたのではなかった。それどころかドイツ古典主義の理念は「革命の理想の先を見越した絶対化」の中で「時代の要求の最終的に可能な抽象」を表現していた、とトレーガールはいう。ドイツ古典主義は「歴史の瞬間を最高に、思想的・詩的に実現すること」により「一つの人間の社会への先取」を試みた。その限りで「ヴァイマル古典主義」が世界文学となりえたことはすでにのべた。

トレーガールにとってはゲーテがフランス革命に反対していたという階級的視点は第二義的であつた。マルクス主義文芸学がゲーテに認めようとする「好意的観察」(E・シュタイガー)か、それとも危険な力の反乱(「フランス革命」に対するゲーテの「公然たる対立」の強調かという二者択一はトレーガールの主たる関心ではない。トレーガールはフランス革命期のドイツ文学の発掘ないし比較によって、ヴァイマル古典主義を歴史的視野の中へ引戻す。しかしかれはそれによってヴァイマル古典主義を歴史的、実践的視点においてわい小化したのであり、その文学的、理念的深みを無視しようとしたのではない。

共時的観点からするとヴァイマル古典主義は相対化される。だが世界文学の長い歴史という通時的観点からすると、その文学は社会的

実体に制約された理論にもかかわらず、「現実主義的な先取」を残した。古典的な世界文学はそのときどきの「歴史的・具体的関連」の中に現存するとはいへ、それはある種の規範性、あるいは「良心の審査」の基本例というべきものをもつ。その規範性は人類の数百万年の歴史に比べると、せいぜい二千―四千年の間に形成されたものにすぎない。その間の「人間的要素」の発展は階級社会の経済と政治によるその利用と比較すれば、ずっと緩慢である。さらに文学が個性や社会の発展の諸段階の間に見つける「差異」は、政治・社会領域で観察される「差異」よりずっと小さいものである。それゆえ文学作品は「数千年の時間を越えても受容可能である。」マルクスのいう「人類の歴史」の構想における大胆な時間省略にならない、トレーガールはハムレット、ジュリアン、グリゴリーの間の約三世紀を「世界史の数分間」に縮めたのである。

このような「短縮された」文学時間の尺度でみると、ヴァイマル古典主義はドイツの進歩的、ジャコバン主義的文学を寄せつけない水準を作り出した。トレーガールはヘルダーの次の「深い思想」を是認する。「あらゆる時代において人間は同一の存在であつた。ただ人間はかれの生活をとりまく制度に依じて、そのつど自己を発現したのだ。」⁽⁹⁶⁾ あたかもトレーガールは、文学の歴史は「人類の空想と願望の歴史」、あるいは「人類の甘美な妄想」の歴史であつたという、ヘルダーの世界文学史観を自己の所有としてにみえる。

われわれは、このように文学史の通時的視点が人類史における「数分間」に短縮された、いわば共時的な視点に移されるのを見た。ところでわれわれの出発点は、トレーガールの世界文学の概念は「歴史的進歩」の内容をもつ、という点にあつた。フランス革命期のドイツ文学

という概念が、ハイネのいう「芸術時代」に對置さるべき概念として定着する可能性をわれわれは性急にも期待した。しかし考えてみると、文学の「歴史」性と「芸術」性の評価は確かにトレイガーのような巨視的視野を必要とするのもまた真実である。

われわれはトレイガーの世界文学観の、通時と共時の矛盾と統一をどのように考えるべきであろうか。おそらくその点にトレイガーの文学の未知的要素と展望がある。「文献学者 (Philologen) 間の分業」はそうした統一的志向をもつ文学研究と對立するかにみえる。文学学者は例えば必然的に「ダンテ文献学者」でなければならぬのか。「文献学者間の分業は見通しがきかぬ程の大量の事実、事細かな知識と認識を明るみに出した。その結果、そうしたものの理論的利用の可能性は個々の研究者の実際的能力に反比例しているようにみえた。」⁽¹⁰⁾ 文献学の集積したほう大な文芸的詳細はもはや文芸理論家の手に負えぬのである。文芸学は「真正正銘のデイレンマ」に陥った。文芸学は「文献学的個別化」の道を進むべきか、それともかかる現状を「弁証法的に止揚可能な知識獲得の段階」⁽¹¹⁾として認識すべきか。トレイガーは後者の立場から次のように回答している。「文芸学における体系的・理論的かつ比較文学的意識は国民的文学史叙述ならびに歴史的方法」⁽¹²⁾に對し無効直言を行つてはならない。しかし比較文学的方法は、「新たな質」⁽¹³⁾としての「世界文学」を構想することを課題にしつつ、文学理論の前提として「芸術的」創造、評価、受容の学問的に基礎づけられた基準⁽¹⁴⁾の確立を目ざすべきである。

このような比較文学的方法の弁明はすでにトレイガーの諸論文に具体化されている。例えば論文「フランスとドイツにおけるプロメーテウス——進歩の間接的ならびに直接的創造」⁽¹⁵⁾は両国におけるプロメー

テウス受容の相違を通して、思想と經濟發展の関連を確かめようとする。論文「ブルジョアのイデオロギー史と方法史の反映としての序文の歴史。世界史的理性から精神史的非合理主義へ」⁽¹⁶⁾はレクラム文庫（一八六七年の『ファウスト第一部』に始まる）の序文を通して、ドイツの歴史と文学史観の関係を概観している。この論文においてトレイガーは「ドイツの文芸学のアシズム化は一つの全く特定の文学史的方法論を基礎に完成した」⁽¹⁷⁾と指摘する。これらの論文はかれのブルジョア文芸学批判の論文と同様、実に多量の文献を比較、整理した労作である。

先にのべた文芸学の「デイレンマ」からの脱出という観点からすると、雑誌『ゲルマニスティク』に最近発表された論文「ジャコバン主義の言語——言語のジャコバン主義」⁽¹⁸⁾がフィロロギー的考察を扱ったものとして注目される。トレイガーはフランス「革命の言語」がドイツの土壤へ移植された過程を、「言語史的基礎」の上で見直すことを提案する。「フランスの歴史と文学への密接な関連の中で發展する、ドイツの歴史と文学は——ヴァイマル古典主義より出発し、一七八九年から七九年にかけての革命の時事評論とロマン主義を経て、三月革命前時代にいたるまで——かかる観点においては、従来言語学上ほとんど注目されてこなかった。いまだに——語い学の全く単純な問題からみても——政治的テキストやすでに革命の語いを記録していた、同時代のドイツ語辞典が綿密に調べられたことはなかった」⁽¹⁹⁾。特にトレイガーは概念の歴史と違つて、定義し難い「隱喩 (Metapher) の歴史に言及している。ある概念がその「本来の内実」から解放されて、「一つの文学上の独自生命」を営むのが隱喩である。一つは概念がフランス革命期の歴史的文脈の中で「言語のジャコバン主義」へと変容するのである。トレイガーは例として、「ゴシック」の国家建築と「美的国家」の隱喩

がヴァイマル古典主義から三月革命前時代への時代の中で、いかに誕生し、成長し、終焉に向かったかを見きわめようとする。トレーガーの提起はフランス革命期のドイツ文学発掘の一方法として有効と思われる。

ヴェーバーによって「選択的」世界文学概念の信奉者として批判の憂目にあつたトレーガーが、ヴァイマル古典主義に対立するジャコバン主義文学の系譜の研究を拡大していく様は「見奇妙であるかもしれない。しかしトレーガーの文学史観が「文学の歴史性」の概念を常に根底にすえていること、かれの個々の論文はかかる批判原理の変身する「プロテウス」⁽¹⁾であることを考慮すれば、フランス革命とドイツ文学のテーマは比較文学上、無視できぬ興味深い課題であつた。それは「ゲーテ時代の精神」を間接的に、しかもきわめて非恣意的に歴史の進展の領域に引戻すであらう。

西ドイツ文芸学への批判的徘徊、さらにヴェーバー、ローゼンベルクによるかれの世界文学史構想の批判は、トレーガーの歴史に密着した方法の中に新たな方法的模索を提起したように思われる。いまや「文学の歴史性自体が批判的に把握されねばならない。」⁽²⁾トレーガーの次の言葉は、かれの文芸学がなお克服せねばならぬ、多くの文学史研究的方法論的課題をかかえていることを示すものである。「文学の社会的関係と文学の歴史性を詳細に実証するために、文学史がなおすき返る (umplügen) ねばならぬ、広大な領域がある。」⁽³⁾

注

トレーガーの著作は省略して記す。

Träger I — Claus Träger: Studien zur Literaturtheorie und ver-

gleichenden Literaturgeschichte. Leipzig 1970.

Träger II — Claus Träger: Studien zur Realismustheorie und

Methodologie der Literaturwissenschaft. Leipzig 1972.

Träger III — Claus Träger: Studien zur Erbehteorie und Er-

beaneignung. Leipzig 1981.

(1) Peter Weber: Die Herausbildung des Begriffs Weltliteratur. In:

Literatur im Epochenumbruch. Funktionen europäischer Literaturen

im 18. und beginnenden 19. Jahrhundert. Hg. v. Günther Klotz, Winfried

Schröder u. Peter Weber. Berlin u. Weimar 1977.

(2) Claus Träger: Weltgeschichte — Nationalliteratur, Nationalgeschichte

— Weltliteratur. In: Weimarer Beiträge, 7/1974.

(3) Peter Weber: Die Herausbildung. S. 536.

(4) Rainer Rosenberg: Deutsche Vormärzliteratur in komparatistischer

Sicht. In: Weimarer Beiträge, 2/1975, S. 97.

(5) Claus Träger: Weltgeschichte — Nationalliteratur. S. 21.

(6) Peter Weber: Die Herausbildung. S. 537.

(7) Rainer Rosenberg: Deutsche Vormärzliteratur. S. 75.

(8) Ebermda, S. 82.

(9) Träger III, S. 237.

(10) Claus Träger: Weltgeschichte — Nationalliteratur. S. 19.

(11) Träger III, S. 232.

- (21) Rainer Rosenberg: Deutsche Vormärzliteratur. S. 75.
- (22) Träger III, S. 238.
- (23) Peter Weber: Einleitung. „Kunstperiode“ als literarhistorischer Begriff. In: Kunstperiode. Studien zur deutschen Literatur des ausgehenden 18. Jahrhunderts. Hg. v. einem Autorenkollektiv Peter Weber (Leitung) u. a. Berlin 1982.
- (24) Vgl. Klaus Bartel: Frühjahrsberatung germanistischer Literaturwissenschaftler in Weimar. In: Weimarer Beiträge, 12/1981.
- Martin Fontius: Nachlese zum Begriff „Kunstperiode“. In Weimarer Beiträge, 3/1983.
- Waltraud Beyer: (Rezension zu:) Kunstperiode. In: Weimarer Beiträge, 3/1983.
- Wolfgang Albrecht: „Kunstperiode“ als Epochenbegriff? In: Weimarer Beiträge, 11/1983.
- (25) Peter Weber: Kunstperiode. S. 8.
- (26) Klaus Bartel: Frühjahrsberatung. S. 168.
- (27) 林聖美 「ペンシメントの展開」のめぐり「DORA」文壇批評の「ト」に
「専ら議論中」の「読者批評」批判のなごり意味をめぐり 「ペンシメント」(田
本独文芸全集) 第六六号、一九八一、五四頁。
- (28) Vgl. Claus Träger: Weltgeschichte—Nationalliteratur. In: Weimarer Beiträge, 7/1974; Träger III.
- (29) Peter Weber: Die Herausbildung. S. 537.
- (30) Träger III, S. 239.
- (31) Träger III, S. 240.
- (32) Rainer Rosenberg: Literaturverhältnisse im deutschen Vormärz.
Berlin 1975, S. 15.
- (33) Claus Träger: Literarischer „Held“ und geschichtliche Entscheidung.
Hamlet—Julian Sorel—Grigori Melechow. In: Träger III.
- (34) Träger III, S. 328.
- (35) Ebenda, S. 334.
- (36) Ebenda, S. 331.
- (37) Ebenda, S. 334.
- (38) Ebenda, S. 337.
- (39) Ebenda, S. 339.
- (40) Träger I, S. 145; Träger II, S. 56.
- (41) Träger III, S. 339.
- (42) Ebenda, S. 250.
- (43) Ebenda, S. 250.
- (44) Ebenda, S. 257.
- (45) Ebenda, S. 265.
- (46) Claus Träger: Geschichtlichkeit und Erbe der Romantik. In: Träger III.
- (47) Ebenda, S. 289.
- (48) Hermann August Korff: Geist der Goethezeit, I. Teil, 10., unveränderte Aufl. Darmstadt 1977, S. VIII.
- (49) Claus Träger: Lessings kritische Methode. Bedingungen und geschichtliche Funktion. In: Träger III.
- (50) Ebenda, S. 36.
- (51) Ebenda, S. 31.
- (52) Ebenda, S. 34f.

- (44) Ebenda, S. 53.
- (45) Ebenda, S. 28.
- (46) Franz Mehring: Die Lessing-Legende. In: Gesammelte Schriften, Bd. 9. Berlin 1963, S. 30.
 メーリングはレッシングの特徴を次のように列挙する。「あらゆる抑圧者に対する憎悪とあらゆる被抑圧者に対する愛、貴族に対する抑え難い反感、不正に対する不断の闘争心、政治的、社会的状況の貧困に対する消極を脱する闘争とあらゆる程に誇りある徳義。」(同前)
- (47) Paul Rilla: Lessing und sein Zeitalter. In: Gotthold Ephraim Lessing, Gesammelte Werke, Bd. 10. Berlin 1958, S. 452.
- (48) Ebenda, S. 452.
- (49) Paul Rilla: Lessings Waffe der Philosophie. In: Sinn und Form, I / 1954, S. 81.
- (50) Träger III, S. 62.
- (51) Paul Rilla: Lessing u. sein Zeitalter. S. 452.
- (52) Träger III, S. 7.
- (53) Georg Lukács: Franz Mehring, 1846-1919. In: Beiträge zur Geschichte der Ästhetik. Berlin 1954, S. 331.
- (54) Paul Rilla: Lessing u. sein Zeitalter. S. 449.
- (55) Hans Mayer: Lessing, Mitwelt und Nachwelt. In: Sinn und Form, I / 1954, S. 30.
- (56) Ebenda, S. 30 f.
- (57) Träger III, S. 60 f.
- (58) Ebenda, S. 51.
- (59) Ebenda, S. 52.
- (60) Paul Rilla: Lessing u. sein Zeitalter. S. 18.
- (61) Träger III, S. 68.
- (62) Ebenda, S. 108.
- (63) Ebenda, S. 74.
- (64) Ebenda, S. 88.
- (65) Ebenda, S. 85.
- (66) Ebenda, S. 94.
- (67) Ebenda, S. 79.
- (68) Vgl. ebenda, S. 107.
- (69) Vgl. ebenda, S. 106.
- (70) Ebenda, S. 108.
- (71) Ebenda, S. 110.
- (72) Ebenda, S. 109.
- (73) Ebenda, S. 104.
- (74) Ebenda, S. 90.
- (75) Vgl. ebenda, S. 111.
- (76) Vgl. Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe, Bd. 7. Berlin 1963, S. 490 ff.
- (77) Träger III, S. 66; Claus Träger: Herder als Literaturtheoretiker. In: Herder-Kolloquium 1978. Weimar 1980, S. 49.
- (78) Peter Weber: Die Herausbildung. S. 537.
- (79) Träger III, S. 242.
- (80) Ebenda, S. 184.
- (81) Träger I, S. 46.
- (82) Ebenda, S. 67.

- (83) Ebenda, S. 279.
- (84) Träger III, S. 278.
- (85) Träger I, S. 333.
- (86) Ebenda, S. 285.
- (87) Claus Träger: Fichte als Agitator der Revolution im Umkreis seiner Zeitgenossen. In: Träger I.
- (88) Claus Träger: Georg Forster und die Verwirklichung der Philosophie. In: Träger I.
- (89) Claus Träger: Aufklärung und Jakobinismus. Die Mainzer Revolutionspropaganda 1792/93. In: Träger I
- (90) Mainz zwischen Rot und Schwarz. Hg. v. Claus Träger. Berlin 1963.
- (91) Die Französische Revolution im Spiegel der deutschen Literatur. Hg. v. Claus Träger. Leipzig 1975.
- (92) Träger III, S. 182.
- (93) Ebenda, S. 267.
- (94) Ebenda, S. 247.
- (95) Ebenda, S. 184.
- (96) Träger II, S. 277.
- (97) Vgl. ebenda, S. 276.
- (98) Träger I, S. 187.
- (99) Träger III, S. 187.
- (100) Ebenda, S. 177.
- (101) Ebenda, S. 267.
- (102) Ebenda, S. 327.
- (103) Vgl. ebenda, S. 110.
- (104) Ebenda, S. 230.
- (105) Ebenda, S. 230.
- (106) Ebenda, S. 230.
- (107) Ebenda, S. 230 f.
- (108) Claus Träger: Prometheus in Frankreich und Deutschland—unmittelbare und mittelbare Erzeugung des Fortschritts. In: Träger I.
- (109) Claus Träger: Vorwort-Geschichte als Spiegel bürgerlicher Ideologie- und Methodengeschichte. Von der universalgeschichtlichen Vernunft zum geistesgeschichtlichen Irrationalismus. In: Träger II.
- (110) Träger II, S. 243.
- (111) Claus Träger: Zwischen Interpretationskunst und „Materialistischer“ Literaturwissenschaft. Die Vollendung des methodologischen Kreislaufs um die unbewältigte Geschichte. In: Träger II.
- (112) Claus Träger: Sprache des Jakobinismus—Jakobinismus der Sprache. In: Germanistik, 2/1983.
- (113) Ebenda, S. 135.
- (114) Träger III, S. 200.
- (115) Ebenda, S. 110.
- (116) Ebenda, S. 218.
- (117) Ebenda, S. 218f.